

---

# 残りモノの福音

ういんすとん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

残りモノの福音

### 【Nコード】

N5807V

### 【作者名】

ういんすとん

### 【あらすじ】

あてのない旅。求めるものもなく、流浪を重ね、ただ気の向くままに。その末に何処に辿り着くのか。

## 第1話 始めと始まり（前書き）

この物語はフィクションです。

## 第1話 始めと始まり

背後、斬撃。

男は身を翻し、逸らす。同時に横薙ぎに一閃。獣は現世と思えぬ断末魔を上げ、霧散する。ソレを一瞥もせず、疾走。  
舞 甲高く鈍い響きが周囲を揺らす。

既に 屠った数さえ数えきれなくなった。

「ちっ、キリがねえ」  
しかし、そこに焦りはなく。

そう、己は囃。

「ルテイ！」

少女は頷き、杖を掲げる。その先端が輝き刹那、地上に地獄が顕現した。

何人たりとも生かさぬ灼熱 朱い世界に黒い霧だけが生えてい  
る。

そして、ソレらは脆くも崩れ去った。

第1話 始めと始まり

「カンパニー」  
チリン、とグラスが鳴る。

響きだけならばどこぞの高級レストラン。だが、ここはいくらでもある、宿屋に併設された酒場である。その一角、小さな丸テーブルで祝杯が挙げられていた。

「ヴァル、これおいしいよ」

少女は正面の男に満面の笑みを向ける。

ヴァルはそれを見て満足げに煙草に火を点けた。

「今日はいくらでも食っていいぞ。たんまり報酬貰ったからな」  
途端、楽しげにしていた少女の顔色が変わる。

「ほんくらひほらはらひとひやりひひやはらいは」

「・・・飲み込んでから喋りなさい」

一拍。

「そんなくらい貰わないと割に合わないわ」

ルティはぶつきらぼうに言いながら、次の唐揚げに手を伸ばす。

「まあ、内容自体は大したことなかったじゃないか」

「そーゆー問題じゃないわよっ」

ドン、とテーブルが鳴る。

「せっかく忘れかけてたのに。蒸し返さないでよ」

怒りを露わに、しかしスープに手を出す少女。

「いやしかなー、少ししたらまた依頼してくんないもんかねーと」

「だからっ、私もうアレに会いたくないの。絶対ヤだからね」

ルティは肉団子突き刺しながら口を尖らせる。

「まあお前はずっと嫌そうな顔してたもんな」

「だって、アレ、私のこと舐めまわすように見るんだもん。いくら

私が美少女だからってさー。あー、思い出すだけでも気持ち悪い」

ルティは心底嫌そうな顔でテーブルに頬杖をついた。

「ま、いるもんだね。幼女趣味のおっさ」

キン　　！

鋭い音が響いた。

「だ、れ、が、幼女ですって？」

ルティの背後から、ゴゴゴッ、と異常な威圧感が迸っている。

「お、おひつへっ」

ヴァルは若干引け腰になりつつ宥める。その口、否、歯の間には  
フォークが鋭い殺意を光らせている。

だがしかし、そこに効果の程は示されない。

「私はっ、もうっ、16だーっ」

ゴン、と鈍い音がして、陶器の割れる音と共にナニカがどさりと崩れ落ちた。

「あーあ、コブになってるわ」

宿への帰り道、俺は額を擦りながら一人ごちた。

街はもう動き出している。そこかしこで開店の準備やらなんやらで騒がしい。

露天商達が出店の場所取りに急いでいる様子を片目に俺は帰路を急ぐ。

早朝、あのおっさんにまた呼び出されたのだ。

一応あんな、ルテイにアレ呼ばわりされる程、でもこの土地の領主らしい。呼びに来た従者がそう言っていた。たしかにデカイ屋敷だったし。

何でも、どうやら至急頼みたいことが出来たとのことだ。

大体、こういった急ぎの仕事は厄介なものが多い。仕方ないので話だけ聞いて断る予定でいた。めんどくさそーだし。

しかし、しかしだ。10万インも出すと言われたら断れない。

考えてもみる。一般的な民の世帯年収が1万8千インなのだ。破格だ。これは断る理由がない。クリアさえしてしまえば当分は働かなくてもいいのだから。念願のグータラ生活が出来る。

今回、ルティは置いてきた。置いてこざるを得ないと言った方が正しいかもしれない。

アレは本気だった。あそこまで嫌がらなくてもな。将来的にはこういう仕事の取り方も覚えてほしいところなのだが。

ま、しかし屋敷で魔法でもぶっ放されちゃたまらない。触らぬ神になんとやらだ。

！

「・・・何か用か？」

立ち止り、自然と殺気が漏れる。

昼時だというのに薄暗い路地から、ロープを纏った陰気を形にしたようなやつが姿を見せた。フードを深く被っているため、顔は分からない。

「フフ、コワイコワイ。いや、少し気になりましたね。声を掛けてしまいました」

黒ロープは事も無げに、そう言った。

敵意は感じない。が、なにか、関わらないほうがいいと勘が告げる。

「生憎だが、急いでるんでね。暇つぶしなら他を当たってくれ」  
俺は背を向け歩き出した。

「フッフ、用心しておきなさい。あなた、凶の星が出ていますよ。」  
不意に、籠もったような声が聞こえてくる。

くだらない。

俺は歩みを止めず、聞き流す。

「天子は恐れず、ただ其を通すのみ」

ッ！！

振り返ると、奴はもうそこには居なかった。

## 第1話 始めと始まり（後書き）

感想・批評またはご指摘など、お待ちしております。

## 第2話 未来は未定（前書き）

この物語はフィクションです。

## 第2話 未来は未定

景色は緩慢に過ぎていく。

遠くには、終わりはないのではないかと思える程の山脈が見える。一面緑で、おそらく中からだど日の光が見えないだろう。それ程に覆い茂っている。

たしかあの辺りから隣国になるはずだ

私は、そんな取りとめもないことを考えながら遠くを眺めている。時折揺れるのが少し煩わしいがこれもまた風情とやらなのだろう。

「あー助かったよなー。馬車まで用意してくれて。歩きだと3日はかかるらしいからな」

後ろからヴァルが話しかけてくる。巾着袋の紐に指を掛けて回しながら。ほっとけば鼻歌でも聞こえてきそうなくらいご機嫌だ。

ああ、こいつ、どうしてくれよう。

「仕事が入ったぞ」

帰ってきたヴァルの第一声が、ソレだった。

私は驚いてスプーンを落としてしまった。

あの仕事が終わったら少し長めの休暇だってヴァルは言っていた。当分、遊び呆けるつもりでいたのだ。この所、毎日のように働いていたんだから少しくらい遊ぼうがバチも当たるまい。

どうして勝手に決めただ、と訊いて

一言、ついでこないからだ、と一蹴された。

・・・それは、たしかにそうなのだが。

私は不満そうに顔を顰めるしか出来なかった。

「最初は俺も断ろうとしたんだがね。困っている人がいると言われちゃーこのヴァル・クラッドレイ、無碍には断らんよ。いやしかし、さすがあのおっさん。伊達に太ってないな」

・・・なるほど。こいつ、金に目が眩んだらしい。

「さて、すぐ出るぞ。早く用意しろ」

・・・!?

「な、なんだって?」

「すぐに出ると言ったんだ。あまり時間もない。急げ」

二度も言わせるな、とでも言いたげな表情。

聞こえてはいたよ。信じたくなかっただけだ。

同時に何やら色んな感情が沸騰し、私の口はまともに機能しなくなった。

そして、事もあろうに私が口撃を仕掛ける前にヴァルは出て行ってしまった。

早くなー、なんて言いながら。

私は生まれて初めて神に祈った。

私があいつを刺してしまっても咎めるなよ、と。

はあ。

思い返してまた萎えた。やっぱり、外の景色に思いを馳せるとしよつ。

とりあえず、私は到着までヴァルを無視することに決めた。

第2話 未来は未定

「何の用だ、お前ら」

馬車が到着するとすぐに一行は男たちに囲まれた。男たちは妙に殺気立って槍を突き付けてくる。

ヴァルとルティは無抵抗を示し、事情を説明するが取り付く島もない。

村は異常なほど殺伐としていた。至る所に闇を払うかのように明りが焚かれ、槍を持った村人たちが所狭しと見回りをしている。それ以外の人影はない。

「やめぬかっ。道を開けよ」

唐突に、男たちの輪を割り、ゆっくりと老人が現れた。

この異様な空気の中で彼だけが不釣り合いな格好である。彼は足が悪いのだろう、杖を突きながら近づいてくる。しかし、佇まいには違和感がない。むしろ場に馴染んでいるように見える。

「村の者たちが失礼致しました。ようこそ、カーレルへ。私はホリツド。現在この村の長をしております。」

好々爺のような物腰。だが、どこか鋭い気配を感じられた。

ヴァルは定めるように眺めていたが、機を逃すまいとすかさず依頼状を見せる。

「ふむ、サドキアのアラド公より話は伺っておりましたが、こんなに早く来ていただけるとは」

「至急のことだったんでな。しかつし、ずいぶんと物々しいな」

「事が事ですので。この村は争いとは程遠い、皆少し気が立ってしまっておるのです」

「・・・そうか。さて、とりあえずそろそろ一息つきたいのだが」  
ヴァルはさつさと中に入るとばかりに話を切り上げた。

「・・・たしかに、もう日も遅い。旅路でお疲れでしょうし。これは失礼しました。では、話は明日にしましょう。リオル、宿に案内して差し上げなさい」

その言葉で深夜のパーティーはお開きとなった。

部屋は簡素な家具があるだけで小ざつぱりとしていた。

ルティは荷物を整理するとベッドに飛び込んだ。

「まったく、手荒い歓迎だったわね。」

少女は枕を抱え込み、顎を乗せる。古宿にしては真新しい生地で触り心地が良い。

「まあ仕方ないだろう。穩便に済んで良かったじゃないか」

ヴァルは特に気に止めた様子もなく、壁を背に刀の手入れをし始めていた。

「はあ、で、結局今回はどういった仕事なの？」

まあ荒事なんでしょうけど、ルティは嫌そうな顔で呟く。

カレル村に行く、着いたら分かる。としかルティは知らされてなかったのだ。

「まだわからん。話を聞かんことには」

へっ、とルティは間の抜けた顔。

「ヴァルも知らなかったわけ？」

「ああ、詳しいことは現地で聞いてくれと言われた。どうやら荒事には変わりないみたいだがね」

ヴァルは顔も上げず、手入れを続ける。

「はあ、あんたをちよつとでも信じた私がバカだったわ。どおりでさつき会話が微妙に噛み合ってたなかったわけね」

ルティはぐつたりと顔を伏せた。

「あんまり溜息吐くと幸せが逃げるぞー」

バフツ。

顔に当たった柔らかいなにか。ヴァルは視界を奪われた。

しかし、特に慌てた様子もなく、彼はソレを手に取りベッドに戻す。

見るとルティはそっぽを向いて布団に丸まっている。

「ルティ」

・・・返事はない。狸を決め込むようだ。

ヴァルはそう判断して、油塗紙を手に再び手入れに没頭する。

明日になったらルティの機嫌も直るだろうと樂觀しながら。

## 第2話 未来は未定（後書き）

感想・批評またはご指摘など、お待ちしております。

### 第3話 違和感の村（前書き）

この物語はフィクションです。

### 第3話 違和感の村

今朝は涼しくて清々しい晴れ模様。

今年は残暑が厳しいなんて街じや噂されていたが、空はそんなこととは忘れてしまったかのようである。

ただ、視界を空から戻すと物々しい雰囲気が眼に入ってしまったことで減点だ。しかし、まあ一応は今も仕事の最中であるのだ。あまり贅沢は言っていない。

隣に目を向けると、昨日とは打って変わってご機嫌な少女が見える。放って置いたら小躍りでもし出すのではないかと思えるほどである。

どうやら朝飯の海老フライ定食がお気に召したようだ。朝からそんな重いもの、俺にはとても理解できないが。

まあどうあれ機嫌がいいに越したことはない。何か飛んでくる確率は確実に減るのだから。

武装した村人達の刺々しい視線に辟易しながら村の中を進んでいくと、村では一番大きい屋敷に着いた。おそらくここが村長の家だろう。

朝食が済んだ頃、俺達は村長に呼び出された。

しかし、俺達は食後の余韻に浸っていたので、少し待つて欲しいと伝えると、なんと、呼びに来た従者はさっさと帰ってしまったのだ。その眼には少し苛立ちが見て取れた。

・・・何だろうか。依頼で来てみたものの、あまり歓迎されていないように感じる。

さらには、従者が場所を教えてくれなかったので少し迷う羽

目になった。

実は俺達はこの村にとって招かざる者なのではないだろうか、な  
どど悲観的な思考が過ぎってしまうのも致し方ないだろう。

屋敷の門の下には呼びに来た従者の男がいた。

お待たせしました、なんて愛想よく笑顔で挨拶したのだが、男は  
無言で門の戸を開けて中に入って行ってしまった。

「怒らせちゃったのかな」

ルティは心配そうに小声で囁いた。

「まあ、気にすることはないさ」

行こう、と俺はルティの頭を少し撫でて、先導した。

うーん、しかし、これはまた、どうにも嫌な感じの村だ。

### 第3話 違和感の村

俺達を迎え入れた村長は、見事に村人達とは正反対だった。満面の笑顔で鬱陶しいくらいにこちらの機嫌を伺っている。

丈の低い机を挟んで座る村長とその斜め後ろに立つ従者の顔を見比べると、なんだか笑える。正に非対称な表情だ。

ルティは出された菓子にご満悦の様子で話しに一切入ってこない。どうやらあいつの中では俺に丸投げすることに決定したようだ。ま、これもいつも通りか。

俺はいろいろと達観した心境になったが、とりあえず、状況をさっさと整理するために、本題について触れてみることにした。

「さて　では、そろそろ依頼の内容をお教えてもらえますか」  
村長もその話題に移りたかつたらしく、すぐに喰いついた。

「あなた方にはこの村の苦境を救って頂きたいのです。

今、この村は非常に危うい立場に追い込まれています。数週間前から近隣の山に凶悪な魔獣が住み着いてしまい、時折、山から下りてきて村を荒らし、作物を奪い、村人を攫っていきます。

ですが、どうやら高い知性を持っているらしく、・・・この村を長期的な狩り場として残している様子なのです。幾度となく襲撃に遭いましたが、まだこれだけ生き延びていられる。」

「いわば我々は自生する家畜なのです、と村長は自嘲する。

辛酸を舐めさせられ続けたのだろう。その心中、理解は出来ないが共感は出来る。

しかしこの時、俺は従者の様子に少し違和感を感じていた。どこか他人事のように見える。

「追い詰められ過ぎないよう無意識に意識をずらしているのか、それとも・・・」

少し考え込んでしまったが、村長は話を続けている。保留して頭の片隅にでも置いておくことにする。

「　　何度か討伐隊を募りましたがほとんどのが帰って来ず、帰ってきたものも皆重傷を負ってしまい未だ動けない。もう私達ではどうにも出来ず、とにかく村だけでも死守するために警備をしている次第です」

話し終わると、村長は俯いてしまった。組んだ手がわなわなと震

えている。

話は分かった。が、少し腑に落ちないことがあった。俺は直接聞いてみることにする。

「ご依頼は理解しました。しかし、一つだけお聞きしたいことがあります。なぜ 私達二人だけなのでしょう。それだけの状況なら軍も動くでしょう」

本来、王軍が出動してもおかしくない話だ。名もない冒険者などに頼むことではない。

村長は苦しそうな顔を上げる。

「国には既に要請を出していますが、戦乱の今、こちらに割ける戦力がないとのこと。領主様も国境の警備で兵がほとんど出払ってしまっているようでした。

そこで、領主様が腕利きの冒険者を見つけ、こちらに救援に遣わしてくださったのです。それが、あなた達だったということですよ」  
一応筋は通っている、のか。

この国の現状に詳しくはないが、情勢が不安定であちらこちらで戦が起きているのは確かである。

というか、前回の仕事は腕試しも含まれていたのか……。

横を見る……。

どうやら俺の一存で決めて良さそうだ。

まあ来た時点ではぼ答えは決まっていたから、疑念など些細なものだ。

「わかりました。お受け致します。この村に笑顔を取り戻しましょう」

俺は、笑って手を差し出した。

出発は昼過ぎとヴァルが決めたので、私は暇つぶしに街を散策していた。

ヴァルは今頃、村長の屋敷で地図とにらめっこしているのだろう。私はそんなことしたくなかったので、散歩してくる、と返事も聞かずに出てきた。

面倒なことは全部ヴァルに押しつけてしまえばいいのだ。私が変に出しゃばるより大抵はうまくいくのだから。

・・・おかげで今回はこんなところに来るハメになったが。

色々見て回ったが村はなかなかひどい有様だった。

畑はそのほとんどが荒らされてボロボロになり作物などなく、既に畑として機能していない。

何より森に近い北側では倒壊した家屋が点在しており、人気がない。

まるでゴーストタウンみたいだ。まあそんなに広さはないのだが。

うん。しかし、この村は変だ。

全ての村人が武装しているのは、そう、状況的にまだいい。が、なぜ、子供がいない。

100人には満たないかもしれないが、それなりに人がいるのに、一番若くて私より少し上くらい。

それに、さつきから気になってはいたのだが、村人から敵意のよくなものを感じる気がする。

単に彼らが殺気立っているだけなのだったらいいのだけど。

私は少しだけ不安になってきた。ヴァルと一緒にいるべきだったのかもしれない。

屋敷に戻ろう。出来るだけ急いで。

### 第3話 違和感の村（後書き）

感想・批評またはご指摘など、お待ちしております。

## 第4話 人の創りしモノ（前書き）

この物語はフィクションです。

## 第4話 人の創りしモノ

見渡す限り、木と草と土

鬱蒼と茂る森。深部に入るほど日の光は届かなくなっていく。

虫の鳴き声の支配する空間を二人の人間が冒していく。

やはり、自然の中に抱かれているときが一番心が落ち着く、ヴァルはふとそう思った。

その横ではルティが拾った枝を振り回し、楽しそうに歌を唄っている。

ヴァルは今現在が仕事の最中であることを忘れそうになってしま

う。魔獣との遭遇もなく、このまま順調に目的地に辿り着けるのではないか、と漠然と楽観が顔を出す。

しかし、これでも2人は一端の冒険者である。

気の抜けた様子ではあるが、常に周囲に気を配り、自然と互いに互いをフォローできる位置を取っている。

既に4年程こつた荒事の多い旅を続けて生き延びてきている。熟練の域に足を踏み入れられる程度の経験は持っているのだった。

「ルティ、そろそろ歌は止めてくれ。もう大分近付いたはずだ」

はい、とルティは間延びした返事をして、枝を捨てた。

！

「俺が討ち洩らしたら、少しくらい派手でもいい、仕留めてくれっ  
言っが早いかヴァルは疾走する。

ルティは頷き、警戒する。

眼前には狼に似た魔獣、ウェアウルフの群れが牙を立てこちらを威嚇していた。

抜刀、居合斬り。

正に神速。反応すら見せず先頭の魔獣は 二つに分たれた。返す刀で左方の魔獣を斬り伏せる。響き渡る断末魔。

刹那、背後からの強襲

ヴァルは振り向きざまに一步引き、紙一重で躲す。ウェアウルフが体勢を整える前に追撃

一閃。

甲高い叫びが響き終わると再び森は静寂を取り戻した。場には悠然と佇む剣士のみ。呆気ない幕切れだった。

「私の出番なかったね」

刀の血を払うヴァルの背に、ルティが事も無げに話しかける。

「他にはいなかったか」

「うん。あの三匹以外には見当たらなかったよ」

そうか、と呟きヴァルは刀を納めた。

時は、既に出発から半刻が過ぎようとしていた。

あれから、魔獣との接触が急激に増えた。  
魔獣の本拠地に近付いているはずなのだ、当然だろう。  
しかし、俺達の道程に支障はなかった。

一般に魔獣との遭遇と言えば、一定以上の危機に瀕する。だが俺達冒険者から見れば、魔獣とは野生の動物と大差はないのだ。たしかに例外はあるが、それは魔物の生息する地に存在する魔獣か、異常な程の瘴気を浴びた魔獣くらいのもの。荒事を主とする者達には脅威に値しない。

そう　カ　レル村にも戦闘の心得を持つ者がいるはず。なのだ  
が・・・

この場合、考えられるケースは二つ。  
余程大規模な魔獣の群れであったか、もしくは　魔物。  
魔物はその力にもピンからキリまであるとは言え、その影響力は少なくとも魔獣の群れなど大きく凌ぐ。

今回の件が魔獣の仕業であることを、俺は祈らずにはいられなかった。

「ヴァル。あれかな」

唐突にルティが俺の腰を突きながら指さす。

その方向には森の切れ端が見え、さらに先には乾いた大地が広がっている。

ルティは視力を魔力で強化することが出来る。直線上に遮蔽物さえなければ、その気になれば一里程度は視界が届くらしい。なんと

もまあ、望遠鏡いらずだ。

見つけたのか、とルティを見下ろし問う。

「なんか壁、切り立った崖、かな。みたいな所に入口みたいな穴があるよ」

首肯しこちらを見上げながら、そう伝えてくる。

俺は、よくやった、とルティの頭を撫でてやる。

こいつは、もう16になるといふのにこつこつして褒めてやると、すごく喜ぶ。

・・・その顔を見たいがためにしばしばやってしまう俺も、どうやら親バカな心境なのかもしれない。

#### 第4話 人の創りしモノ

眼前には二十メートルはあろうかという切り立った崖。その麓に大きく口を開けた穴の前に私達は立っていた。近付いてから分かったことだが、ここは古い炭坑のようだ。薄暗く見え辛い、壁などに木材の補強があり、滑車を引く路が見える。

そもそも、魔獣の住処は正確には分かっていたらなかったらしい。

討伐隊は目的地に辿り着くまでに壊滅してしまったそうで、村民たちはその地点の方角に住処があると勝手に断定したらしい。

進むにつれ魔獣との遭遇の頻度が増えていったのであながち間違っ  
つてはいない。

しかし、まあなんとでも大雑把である。

さらに出発前にヴァルが、「穴だ。巣と言えば穴だろう」と、これまた大雑把な、変な理論を持ち出してきた。

正解も分からないし、私には代案もなかったし、反対する理由は特  
にない。

とりあえずそれを目標に探索していたが、どうやらそれも当たっ  
てしまったようだ。

案外、世の中は適当に廻っているのかもしれない。

入口から少し離れた場所に人骨と思わしきものが積まれていた。

・おそらく、連れ去られた村人達だろう。

今更この程度で怖気づいたりはしないが、やはり気持ちのいいも  
のではない。

ヴァルを見ると、頭をポンポンされた。

落ち着く。こいつはこういうところがうまいから困る。

しばらくそのまま見ているとヴァルは顔を引き締めた。

「よし、行くぞ」

その声で私達は暗い穴に入ってしまった。

炭坑の中は仄暗く、少し進むと何も見えなくなってしまった。

私は魔力を集め、光の球をいくつか創造する。この子たちは込め  
た魔力が切れるまで自動で追尾してきて辺りを照らしてくれる。

リズ・ルーチェ

探索には欠かせない魔術である。

明るくなつた周囲を見回すと、さすがに炭坑だけあつて結構がっしりと型が組んであり頑丈に出来ているようだ。これなら少しくらい暴れても大丈夫だろう。

視界は確保できた。しかし、しかしだ。この臭い。非常に獣臭い。さらに腐臭が混じり、凄まじく芳醇な異臭が出来あがつている。

隣を歩くヴァルは気にも止めていないようで、平然としている。こやつ、鼻がイカしてるのではなかるーか。

私は自分の鼻が早く潰れてくれることを期待するしかなかった。

時折襲いかかってくる魔獣を蹴散らし、奥へと進んでいく。

途中、幾つか分かれ道があつたが、ヴァルは悩む素振りもなくガングアン先行していく。

どうやら気配の濃い方に進んでいるようだ。一応、考えているようで良かった。ただの勘だったら思いっきり叩いてやったところだ。

私の鼻がマヒしてきた頃、そこに行きついた。

繰り返す変わり映えしない景色に取るに足らない戦闘。

私は正直、飽き飽きしてきていたのだ。

ようやくそれらしい場所に辿り着いて、私は少しほっとした。

そこは大きな広間だった。王都の中央広場くらいの広さがありそうだ。奥の方までは光が届いていない。

炭坑になぜこんな場所があるのか疑問に思ったが、それはすぐに解消された。

ここは自然の産物、天然の空洞のようだ。坑道を掘っているうちに掘り当ててしまったのだらう。

何処にも手を加えた様子がないことから、掘り当てたものものとりあえず放置したのか、はたまた・・・

ここが終点であることに何か意味があるのだろうか。

私は、そこまで考えて、思考を戦闘用に切り替える。  
広大な空洞の奥、無数の気配を感じる。  
一先ず、すべきことは

私は、光量を最大にして広間の総てを明るみに晒した。

視界が明確になると、私達がその場を飛び退いたのは殆ど同時だった。

それまで立っていた地面が煙を立てる。  
瞬時に体勢を整え、状況を確認する。

まずい。分断されてしまった。

既に周囲は囲まれている。

ヴァルも同じ状態だ。すぐには来れない。

これ程統率の取れた行動を取られるとは予想外だった。

完全に後手に回っている。

とにかく、時間を稼がなくてはいけない

そもそも、私は一般に良く知られる魔術師と同じで後衛役なのだ。戦闘は前衛に任せて砲台の役割を果たすタイプである。接近戦は望むものではない。全く出来ないわけではないが、一般人に色が付いた程度だ。魔獣相手でも危ないときもあるのだ。

じりじり距離を詰めてくるナニカ。

そう　　ナニカだ。だが、今はどうでもいい。

私はソレを傍目に、最速で術式を構成する。  
ナニカはもそもそとおぞましい動きで迫ってくる。  
非常に気色が悪い。

あと、少し。

ナニカは既に攻撃の体勢に入っている

「                    フィル・レザッシュ                    」

力ある言葉が響いた。

刹那、鞭のように飛んできた触手を弾き飛ばす

さらには迫っていたナニカを切り刻み、押し返した。

私を中心に十数メートルほどの空間が出来る。

しかし、まだ安心はできない。

あれはどちらかと言うと、距離を取るための魔術だ。  
平地では、それ程ダメージは期待できない。

私はすぐに新たな術式を構成する。

瞬間、私の掌に拳大の火球が現れる。

それを                    投げつける。

火球は着弾とともに爆散

ナニカの右腕部を吹き飛ばした。

そう                    ファイヤー・ボールだ。

初歩の魔術だがそこそこ威力があり、使い勝手が良い。  
とにかく、ここは、手数で勝負。

発動、投げる、発動、投げる、発動、投げる

私がひたすらにそれを繰り返していると、ナニカは警戒して近付いてこなくなった。

私とナニカが睨めっこを続けていると

「ルテイ、平気かっ」

ヴアルが上から降ってきた。隙を見て飛び越えてきたらしい。

ふう、助かった。

「遅い」

私はとりあえず悪態を吐いておいた。

悪い悪い、とヴアルは苦笑いする。

そんなことよりも、気になることがある。

「ヴアル、あれってやつぱり」

「ああ、キメラだ」

笑えるくらい、あっさりと答えが返ってきた。

なんとなく予想は付いていたのだ。

見たことのない生物。いや、見たことのある生物が継ぎ接ぎされた様に合わさっている生物。それも個体ごとに見た目が違う。

書物で読んで知識として知ってはいたのだが。まさか、目にすることになるとは。

### 生命の冒瀆

外法を用いることで元来の理を捻じ曲げ、別個の生物から一つの生物を生み出す。

邪道の果ての一つ。人の発明した禁忌である。

その本にはそう記されていた。

「・・・なんで、こんな」

私は少し動揺してしまう。

「今考える時間はない。とりあえず目の前の問題を解決しよう。いけるか？」

目が合う。力強い真っ直ぐな目。そこからは信念と覚悟が観える。

それは私の惑いを解くに十分だった。

私は、大きく頷いた。

それにヴァルは笑顔で返し、私の頭を撫でる。

・・・だから、それはハンソクだって・・・

## 第4話 人の創りしモノ（後書き）

感想・批評またはご指摘など、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5807v/>

---

残りモノの福音

2011年10月7日01時57分発行